

中学英語教育において“input→intake→output”への流れを作るためのICT活用

～音読・暗唱・暗写から自発的プレゼンテーションへ～

東京都立白鷗高等学校附属中学校

〒111-0041
東京都台東区元浅草3-12-12

<http://hakuo.ed.jp/index.php>

1 はじめに

「中学校の英語学習に予習は必要か？」開校当時から白鷗中学では予習中心の学習が行われてきた。これに対して今から3年前、私たち研究チームが中学校での英語指導を開始するにあたり、私たちは協議の末、この問いに対して「No」という見解を示した。その理由は2つである。まず、語彙・文法などすべてのことが未知なるものである中学生にとって、独学で予習をすることは相当な負担になること。2つ目は、学習内容の定着の観点から、学んだことを復習し、それを覚えていくことの方がはるかに効率が良いだろうと考えたからである。「辞書は友達、予習は命」というこれまでのモットーを、「教科書は友達、復習は命」と変え、基礎力の定着を目指して徹底した指導を行ってきた。この指導に大きな役割を果たしているのがICTである。

私が担当する6期生からは、復習中心の学習実現に向け、検定教科書の「音読・暗唱・暗写」を学習の基本として指導を行っている。教科書準拠のデジタル教材をプロジェクターでスクリーン上に映し出すことで、効率よく何度も音読でき、暗唱しやすくなった。生徒の顔が正面を向くことで、大きな声が出るようにもなった。音読による反復練習の結果、暗唱した英文を何も見ずに書き取る暗写テストでも多くの生徒が満点を取れるようになってきた。さらに、覚えた英文の一部を入れ替えるなどして、自分自身で英文を作るという応用力もついてきた。家庭で暗唱し、暗写練習する復習が成果を上げ始めている。これを受けて、現在中学2年生である7期生と現在中学1年生である8期生でも同様の指導が行われてきた。

しかし、これが私たちの最終目的ではない。これらの活動を積み重ね、自発的なプレゼンテーションができる力を付けさせることが、我々のねらいである。「音読・暗唱・暗写」で語彙や表現をinputし、英文の一部を入れ替える活動等でintakeを促す。そして、最後にはパワーポイント等を使いながら図表やデータを示し、個人で、あるいはグループとして、プレゼンテーションという形でoutputができる生徒の育成を目指している。これら一連の流れを作るために、我々研究チームにとってICTは日々の指導に欠かせないものとなっている。

本校には通常の英語の授業の他に、中高6年間を通じて、英語で発信することを目的とした科目がある。中学1年では「英会話」の時間に対話活動を行い、中学2年・3年では「プレゼンテーション」の時間にShow & Tellなど身近な話題を人前で話す基礎を学ぶ。高校では「英語表現」の中で表現活動を発展的に学んだあと、高校2年・3年では「Presentation in English」の中で、個人だけではなく、グ

ループによる発表活動を一層深めていく。これらの活動はいわば、**output** 活動に該当する。これらの活動の基礎となる **input** は検定教科書を使った「音読・暗唱・暗写」で培われる。次に、**input** したことをきちんと定着させるための **intake** という段階が必要となる。**input** から **intake** につなげる活動を効果的なものとするために、ICT 機器の活用を積極的に行っている。中学1年生から3年生までの授業では、50分の授業の大半を音読活動に費やしている。一見単調で受動的に見える音読活動だが、ICT 機器を活用することで、バリエーション豊かな積極的な活動にすることができる。文字を見て音読することはもとより、カラオケの様に文字が現れては消えたり、英文の一部を消して音読したりすることもできる。さらに、文字を全て消すことによって、シャドーイングの練習も可能である。対話文の場合には、ペアになって役割練習することもできる。これらの方法を通して、生徒たちは1時間に20回程度音読練習をしている。その結果、大半の生徒が授業中に英文を暗唱するところまで到達する。中学2年の段階では、教科書に出ている絵をスクリーン上に示し、その絵を見ながら教科書の内容を自分の言葉で語るストーリー・リテリング活動を始めている。この活動は、上述のプレゼンテーション活動への布石となる。

さらに、授業の冒頭では英検3級以上の面接試験で使用されるものと同様の絵を示し、それについて説明する活動を取り入れている。1枚の絵を、クラスの生徒全員で共有し、同じ大きさを示すことができるのも ICT 機器の利点である。今後は、Youtube などの動画をスクリーン上に提示し、それについて英語で説明する実況中継活動も導入していく予定である。このように、教科書の音読・暗唱・暗写活動を通して **input** したものを、さまざまな活動を通して **intake** し、最終的に自発的に **output** を行うことができる生徒を育てるために、そしてまた、中高6年間の一貫した指導を行う上で、今後も ICT 機器を一層有効活用しようと考えている。これまでの実践により、6期生以降の生徒たちは ICT 機器を活用した指導により、確実に **intake** が促進されている手応えを感じている。

以下、6期生、7期生の実践を中心に報告していく。なお、8期生については、これまでの学年とは異なる模擬試験等を受験しているため、単純にはそれ以前の生徒たちと比較することが難しいため、今回の報告書には詳しい実践報告は載せていない。ただ、異なる模擬試験においても、他校と比較すると、確実に英語の力を付けているということだけは付け加えておく。

2 6期生の取り組み

前述したとおり、白鷗高校附属中学校開校以来、英語指導においては6期生がまさに指導の流れを大きく変えたと言える。5期生以前には、検定教科書と並行して検定外教科書も使用していたが、限られた時間の中で両方を行うのには無理があるように思われた。どちらかひとつに絞って指導した方が、より定着度が増すのではないかという思いがあった。本校が公立中学校であることを考えると、検定外教科書ではなく、検定教科書を使うことが自然の流れであった。ただし、使う以上はとことん使いこむ、そして徹底した定着を図りたいという思いから、私たちの研究は始まった。

2-1 音読・暗唱・暗写

かつて、自分自身が中学生の時代には、音読をし、暗唱させられた記憶がある。しかし、これこそが外国語学習の基本ではないかと考えた私は、基本に立ち返った学習をすることを考えた。授業中に声を出して教科書を読み、家庭でも音読練習をする、そして英文を暗唱することを基本とした。さらに、覚えた英文を書けるようにすることまでを、一つのサイクルとして授業の流れを作った。学習開始当時は、

まだ ICT 機器の配置も十分ではなく、ハンドアウトを使用したアナログ式の授業形態であった。中学 1 年の夏休み以降、学校内でも ICT 機器の使用が積極的に進められ、徐々に使用機会が多くなった。最初は試行錯誤の連続であったが、いったん使用方法を学習すると、ICT 機器は生徒にとっても教師にとっても非常に優れた学習ツールであることがわかった。教科書準拠のデジタル教材を使用して、文字を隠したり、消したりするなど、インテイクを促すには非常に有効な手段となった。

2-2 音読・暗唱・暗写からその先へ

しかし、暗唱して暗写ができるようになるだけでは、本当の英語学習とは言えない。実際にインテイクした英文や表現の一部を変えて、自分の言いたいことを言えるようになってこそ、本当の英語力が付いたと言える。そこで、まずは英語を使用する場面を多く作ることを考えた。それは、各科目を完全独立制にし、それぞれの科目間の連携を図りながら無駄のない授業展開を行うというものである。6 期生では、週 5 時間ある英語の時間を次のように分けている。3 時間は検定教科書を扱う時間。1 時間は文法項目を明示的に扱う時間。そしてもう 1 時間は速読の時間である。文法の時間は、教科書に現れる新出文法項目を、教科書に先行する形で導入する。こうすることにより、教科書を扱う時間では日本語の説明が少なくなり、結果英語を聞いたり話したりする時間が多くなるのである。教科書を扱う時間では、教科書の内容をリプロダクションする試みを行ってきており、この時に今回購入した IC レコーダーを使用した。自分が読んだ英文を自分で聞き直し、少しずつ改善していくというものである。この活動により、自分自身でのフィードバックが可能になった。

これらの英語の授業に加えて、本校には「プレゼンテーション」という学校設定科目がある。ここでは、通常の英語の時間に学習した文法項目を実際に運用することを目的として、主に発表活動を行った。以下、具体的な例を示す。教科書ではキング牧師の”I Have a Dream”を扱った。文法項目は後置修飾。先行する文法の時間に後置修飾を学習し、「プレゼンテーション」の時間には”The person I respect.”というタイトルで発表を行った。発表時にはビデオ撮影を行い、生徒の進捗状況を記録するとともに、時に生徒自身にも見せ、フィードバックを行った。

2-3 結果

さまざまな ICT 機器を使用しながら、繰り返しとスパイラルな活動を取り入れたことで、6 期生以降の英語力は格段に進歩した。ここでは、GTEC および Z 会模試の結果を学年内比較および学年間比較したデータを示すことで、その効果を示すこととする。

【GTEC】

実施時期	昨年度		今年度		前年度生		中 3 全国
	11 年 12 月		12 年 12 月		11 年 12 月		
	スコア	グレード	スコア	グレード	スコア	グレード	
トータル	370.1	2	492.7	4	435.3	3	397
リーディング	129.0	2	184.4	4	160.7	4	144
リスニング	149.7	2	194.1	4	170.4	3	153
ライティング	91.4	3	114.2	4	104.3	4	99

【Z会】

	昨年度	今年度	前年度生
実施時期	11年2月	12年2月	11年2月
偏差値	48.2	50.3	45.1

2-4 考察

徹底した音読・暗唱・暗写により確実に基礎力が身につけてきていることがわかる。さらに、速読やTOEFLのライティングを意識したライティング練習などが、GTECにおけるリーディングおよびライティングの得点を向上させている。また、リスニングの力が非常についていることから、ICT機器を使った活動により、正しい音声が生徒に定着しているものと推察できる。来年度高校に進学するに当たり、検定教科書のレベルもはるかに難易度を増す。また、本校では約80名の高入生徒を迎えることになる。中学3年間の英語指導の異なる生徒たちをどこまで伸ばすことができるかも、今後の課題と言える。

3 7期生の取り組み

3-1 目的

ICレコーダーを活用することで、より個々の学習者レベルに合わせた授業を実践する、というのが、今回の目的である。

①背景

6期生以降、それまでの予習ありきの授業から復習中心の授業へとシフトし、検定教科書の「音読・暗唱・暗写」を中心としたレッスンを実践してきた。その際、ICTを活用し、準拠のデジタル教材をプロジェクターを通してスクリーンに映し出すなどして、生徒に効率よく音読をさせることにも成功してきた。ただ、学習者の習熟には当然ながら個人差があり、例えば「音読20回」を生徒に指示しても、それがすべての生徒に適切な音読の回数かと言えば、無論そのようなことは無く、そこが課題として残っていた。

そこで、ICレコーダーを使用し、これまで全員で行っていた音読を、個人練習のスタイルにしてはどうかと考えた。

②ICレコーダーのメリット

ICレコーダーを使用して個別に音読練習をすることの利点は、以下のようなことが考えられる。

- ・再生スピードを変えることができるので、各個人のレベルで音読練習をすることが可能。
- ・同じ箇所をリピート再生できるので、発音の難しいところを重点的に練習することが可能。
- ・全生徒がヘッドフォンを使用して行うので、他人を気にせず大きな声で練習することが可能。
- ・自分の声を録音できるので、生徒は自らの発音・イントネーション等を確認することが可能。

3-2 実施方法

①生徒数分すべてのICレコーダーに、事前に教科書本文の音声を入れておく。

※音源はPCを経由してICレコーダーに入れることが可能

②授業中、音読練習の際にICレコーダーを配布する。

③生徒に音読練習の時間のみ示し、音読の回数や方法などは生徒の自由とする。なお、音読の時間中は、スクリーンにパワーポイントで作成した英文を映し出し出しておくが、一定の時間ごとに、次のように変化させる。

Etsuko was talking / with Roku / about her trip / to Australia.

→ エツコは話していた / with Roku / 彼女の旅行について / to Australia.

→ エツコは話していた / ロクと / 彼女の旅行について / to Australia.

→ エツコは話していた / ロクと / 彼女の旅行について / オーストラリアへの。

④制限時間終了後、ペアおよびグループワークで、暗唱チェックをする。

⑤暗唱終了後、ストーリー・リテリングへと移行する。

3-3 結果

①外部試験の結果より

以下、2つの外部試験の結果を示す。なお、参考までに、前年度生（6期生）の結果も合わせて掲載する。

【GTEC】

実施時期	昨年度		今年度		前年度生		中2全国
	11年12月		12年12月		11年12月		
	スコア	グレード	スコア	グレード	スコア	グレード	
トータル	265.1	1	382.8	3	370.1	2	321
リーディング	81.6	1	143.0	3	129.0	2	109
リスニング	112.1	1	145.8	2	149.7	2	125
ライティング	71.4	2	94.0	3	91.4	3	85

【Z会】

	昨年度	今年度	前年度生
実施時期	11年2月	12年2月	11年2月
偏差値	45.1	49.3	47.6

②生徒アンケートより

3月に行った授業アンケートの中に、「授業中に行っている諸活動で、自分自身の英語力向上に役立っていると感じるもの」を選ばせる質問があった。そこで「ICレコーダーを使用した音読個人練習」を選んだ生徒は、160人中132人（82.5%）であった。

また、自由意見欄にあがった生徒の声をいくつか紹介する。

- ・自分のペースで練習できるから助かっている。
- ・一人でじっくり練習できるのはいいと思う。
- ・何度も、好きに、じっくり英語を味わうことができる。
- ・すぐに暗唱できるようになる。
- ・読みにくい単語も、何度も練習できるので、発音もできるようになる。

- ・家じゃこんなことできないので役立つ。
- ・ヘッドフォンをしているので、集中して暗唱できる。

3-4 考察

外部試験の結果からわかる通り、この一年で7期生の英語力は飛躍的に伸びたと言える。また、授業アンケートの結果からも、ICレコーダーを使用しての音読活動は、「英語力が伸びた」と実感させるものであったと言える。

これは、ICレコーダーを利用することで、自分のペースで、誰の目も（あるいは耳も）気にすることなく、効率よく音読をしてきたことが、またそのことによって効果的に英語をインテイクできたことが影響したと考えられる。

4 今後の課題

今後は、intakeされたものがどのようにoutputされるかにも注目していきたい。自発的なプレゼンテーションの中に、どのような語彙や表現がどの程度使われているのか、さらに、その語彙や表現を学習したのがいつなのかについて調査・分析することで、定着の正確さや深さを知ることができる。その際にも、AV機器やiPadなどのICT関連機器を使用して、生徒の発表を録音・録画することで、そのデータを蓄積することができる。

例年実施している外部模試、GTEC、英検、あるいは中学2年次に東京都教育委員会が実施する学力向上調査の結果などについて、中学1年から3年生までを横断的に定点観測することで、取り組みの成果の継続性を見ることが可能である。また、同様のデータについて、ICTを積極的に導入しはじめた6期生以降のデータと、ICTを使用していない5期生以前のデータとを比較することで、ICT利用の成果が歴然と現れるものと確信している。

中高一貫校として来年度で8年目を迎える本校であるが、これまでは試行錯誤の連続であり、一本筋の通った指導体制が完成していなかった。ICTを導入し、デジタル教材等を使用し、音読・暗唱・暗写に力を入れて基礎力定着を目指した指導をしてきたことが生徒の英語力向上に大きく寄与していることが証明されれば、これからの本校の英語教育における指導方針の柱ができ、同僚たちと成果を共有しつつ本校の特色として指導の継続性が保たれることとなる。その意味で、この研究への取り組みは非常に大きな意味を持っているものとする。今後は文献研究なども含めて、理論と実践の融合を図っていきたいと思う。

5 参考文献

『英語教育』 March, 2013 Vol.61 No.13 大修館書店

(執筆分担 北田和吉 3章 7期生の実践、 中野達也 3章以外)